

文・皿木喜久

題字・藤渡辰信

# 紅陵に命燃ゆ

佐賀県の吉野ヶ里遺跡。邪馬台国の跡とする説もあり  
古代史論争を盛り上げている (藤原重信撮影)



## 拓殖大学校歌

大正8(1919)年に20周年を迎えるにあたり、歌詞を募集した結果、宮原民平教授のもの

のが採用された。これに陸軍軍楽隊隊長の永井建子が曲をつけ、20周年記念陸上運動会で披露された。「右手(めて)に文化の炬(ひ)をかか

け」で始まり、「海の外」に人生を切り拓けと、建学の精神そのままに、志の高さを歌い上げている。なお拓殖大の校名は一切入っていない。

白鳥は「ここから「東洋協会調査部学術報告」(後に「東洋学報」)を刊行、東洋史の一方の牙城とした。また東洋協会専門学校でも一時、教鞭をとっている。(毎週土曜日掲載)

東洋協会は台湾研究などを目標とした台湾協会が、その幅を広げるため明治40年に改称した。協会が運営する台湾協会専門学校も東洋協会専門学校(後に拓殖大学)と名を変えていた。

白鳥は「ここから「東洋協会調査部学術報告」(後に「東洋学報」)を刊行、東洋史の一方の牙城とした。また東洋協会専門学校でも一時、教鞭をとっている。

一方の白鳥は、英語、仏語、独語、朝鮮語、モンゴル語、ハンガリー語などを駆使して、中国以外のいわゆる塞外(辺境)にまで研究の対象を広げ、その名は欧米にまでとどろいた。

東洋史研究のコーディネーターとしても手腕を発揮する。明治37年には70、80人の学者を集め「亜細亜学会」を設立、さらにこれを吸収する形で、東洋協会に調査部を作った。

東洋史研究のコーディネーターとしても手腕を発揮する。明治37年には70、80人の学者を集め「亜細亜学会」を設立、さらにこれを吸収する形で、東洋協会に調査部を作った。

「(宮原先生は)漢学ばかりやっていたはだめなんだ。水滸伝を讀みなさい。三国志を讀みなさい。京劇を見なさいと、こう言っているわけです。支那とは何かというのを探っていく上での方法的なものもがきつと示されている」

江戸時代までの日本の学者がそうしたように漢学、つまり儒教中心に中国を学ぶことよりも、実際の中国の文化や生活に学べということだった。自らも中国の戯曲に研究したいくつもの著作を残した。

時代は正統から昭和である。日本と大きな関わりを持つ中国は揺れ動いていた。その中で変わらぬ中国の本質は何か、という問題が日本人に否応なしに迫っていたころだ。

そうした中、宮原は拓大の学監のほか、東京帝国大学、早稲田大学、法政大学の講師もつとめながら、「生きた中国」を追求しつつあった。その教えは、若い生徒たちに大きな感銘を与え、多くの若者が中国大陸へと飛び出していたのである。今また、尖閣諸島をめぐる問題などで日中関係が難しい段階を迎えているだけに、「生きた中国を学べ」という宮原の学問は輝きを増してくるようだ。

白鳥庫吉「岩波書店『白鳥庫吉全集1』から



内藤湖南と論争に火を  
卑弥呼の国はどこにあったのかという「邪馬台国論争」ほど、日本人を知的に興奮させるテーマはなぞぞうだ。  
古くは新井白石の筑後国(現福岡県)山門郡説に始まり、その比定地は東は近江から畿内、四国、沖繩を含めた九州各地にまで広がっている。  
専門の古代史家や考古学者から専門外の学者、サラリーマン、自営業者までがそれぞれの「邪馬台国」を持っているといっている。その存在を記した中国の「魏志倭人伝」の記載に、多様な解釈を許すあいまいさがあるためだが、こ

んな例は世界にもあまりない。この長い長い論争に本格的な火をつけたのは白鳥庫吉と内藤虎次郎(湖南)だった。明治43(1910)年のことである。  
まず京都帝国大学教授の内藤が同大学文学部の雑誌『藝文』に、3回にわたり「卑弥呼考」という論文を載せる。「邪馬台国」の国名を旧説のように「大和」に戻す。

## その5 白鳥庫吉と宮原民平



宮原民平「拓殖大学創立100周年記念『右手に文化の炬をかかけ』から」

「魏志倭人伝」に出てくる国名も近畿地方や周辺の地名に比定し、卑弥呼は垂仁天皇の皇女、倭姫命であると断じた。純然たる畿内説だった。  
これに対し東京帝国大学教授の白鳥は、内藤の最初の論文が発表された5月の翌月から、雑誌『東亜之光』に「倭女王卑弥呼考」を書き、「魏志倭人伝」の記述を仔細

に検討した結果として「倭人伝にある女王国の版図は九州北部一帯であり、その都である邪馬台国は肥後国(現熊本県)にあった」と内藤説に反論した。  
双方の説とも生意気の部分もあった。しかし東西の歴史学の泰斗、同士の論争だっただけに、大いに

関心を呼んだ。長く九州説と畿内説が対立するきっかけとなったのである。とはいえない論争、「出来レース」とは言われないが、かなり用意されていた気配がある。  
佐伯有清氏の「邪馬台国論争」によれば、「一歳違い(白鳥が上)の二人はその10年ほど前から親交があった。しかも京大に東洋史学の講座が設置される時、白鳥は

「生きた支那から学べ」  
その学問を引き継ぐ形で「拓大支那学」を起したのが宮原民平である。  
宮原は明治39年に台湾協会専門学校を卒業、東洋協会専門学校の教授となった生え抜きの「拓殖大人」だが、不思議と白鳥との接点は見つからない。恐らく宮原の留学などで、白鳥の東洋協会時代と年代的ズレがあったからかもしれない。しかし身近な所に偉大な碩学がいたことが大きな刺激になったことは間違いないだろう。

宮原民平(みやはら みんぺい) 明治17年、現在の佐賀県多久市生まれ。35年、台湾協会専門学校に入学。在学中に日露戦争が始まり、陸軍通訳として、第8師団に属し満州に出征。復学し39年卒業、同校講師となる。44年1月から翌年5月まで支那文学、語学研究のため清国に留学。帰国後、東洋協会専門学校教授となり、学生

監、主事などをつとめる。大正11年、同校の昇格にともない、引き続き東洋協会大学教授。昭和13年拓殖大学教授兼予科教授。14年10月から第7代学監をつとめた。19年1月死去。享年60。「東洋時報」(後に「東洋」)「拓殖文化」などに膨大な論文を残した。

# 邪馬台国から東の支那学へ